

という一行から始まる詩だったように思う。

#### 国体開催

#### 市民運動の灯

ここに立ち

心を澄ませば あの花の

あの熱気がよみがえってくる

隣もうちも 子どもたちも若者も

みんなできつくりあげた「あかぎ国体」

声をかけ合い

心結びあったあのとときの

一人ひとりの笑顔がよみがえってくる

いまここに

「市民運動の灯」を高くかざして

汗と力を 永遠の時に刻む

この町を深く愛する心が

あの炬火のように赤々と

いつまでも燃え続けることを願いながら

NHK朝の連続ドラマ「おしん」が放映されていた昭和五十八年、群馬県では「あかぎ国体」が開催された。県内の市町村総出の一大イベントで、開催の準備は元より「市民運動」の名のもとに国体を契機に新しいまちづくりを始めようという機運が盛り上がった。開催日前には「炬火」（オリンピックの聖火のようなもの）が町中を走り、町は国体一色に盛り上がった。そして、嵐のような国体が成功裏に幕を閉じた後、感激屋のK市長は国体の記念として永遠に灯り続ける「市民運動の灯」というガス灯のようなものをつくり、その

下にK市長名の記念碑をつくると言い出し、その文面はお定まりの私の詩ということになった。記者クラブの一部からは「市長名にするのは大橋さんの詩への冒瀆だ」という反論も出たがK市長は意に介さなかった。

今回のこの文章を書くにあたり、その記念碑を確認しようと久しぶりに市役所へ行ってみた。確か、正面玄関付近だったはずだが、その辺りに記念碑はなかった。ガス灯のようなものもなかった。都合で別の場所に移したかもしれないと思って構内を探したが、どこにもなかった。考えたら選挙で死闘を演じたかつての政敵である新市長が、前市長の道楽でつくったような代物をいつまでも残して置くはずはなかった。「君の詩が永久に残るんだぜ」と私に発破をかけたK市長の土建屋のオヤジみたいな顔が市役所の屋上の上の寒い空に浮かび上がった。

### 千鳥さんの音楽

漆原正雄

その日、千鳥ちどりさんは母親の古代こよこ子さんとお花を摘みにお山にでかけたのでした。

風がびゅーびゅーふきあれていたもので、ふだんはおとなしい木々が右へ左へ首をふり、草花もおおげさにさわぎたてていました。リスやイタチなど小動物は倒木のしたに身をひそめ、カラスやトンビもいそいでねぐらへ帰っていきまます。

きょうのお山のおんがくは、なんておそろしいのだろう！ 千鳥さんの肌が栗あか立ちました。

千鳥さんは、だまってお花を摘んでいる古代子さんを見習いつつも、恐怖をまぎらすために胸のうちで（これはお仏壇、これはわた

「お花さん、これは親戚のおじさんおばさんに……」などつぶやいては、ちいさなひらに黄色や紫色、青色の小花を集めていきました。

やがて陽が落ち西の空がかげりはじめたので、ふたりは手をつないで山をくだりました。

ふもとをすぎても、色とりどりのささやき声がきこえてきます。かごを見れば、お花たちがかすかにふるえています。

きつとお花さんたちも風がこわかったのね。千鳥さんは、そのことを古代子さんにつたえました。

古代子さんはにっこりとわらって、

——おうちに連れて帰ってあげれば、すぐに安心するでしょう。といいました。

帰宅したあとも、お花たちのふるえはとまりませんでした。千鳥さんにはすっかりおびえているように見えます。ちゃぶ台のうえで、なおもこわいこわいお山のおんがくをきいているふうです。

お花さんたちを元気づけてあげよう。千鳥さんは、おおきく息を吸ってから、即興の詩にふしをつけてうたってみました。

風のつよい夕方に

母ちゃんとお山へ

お花とりにいつた

山のおんがくは

おそろしかつた

(「しぜんのおんがく」)

するとお花たちの身ぶるいがとまりました。そして、ほのかに花びらの色を濃くして、見よう見まねでうたいます。

「お花さん、だまってお花を挿んでいる古代子さんを見習いつつ、恐怖をまぎらすために胸のうちに……」これはお花さん、これはわた

山のおんがくは  
おそろしかつた  
おそろしかつた

千鳥さんはとてもたのしい気分になり、顔をかがやかせました。指揮者のように腕を左右にふりながら、なんどもなんどもお花たちとうたわせました。いましがた、じぶんがつくった詩に、お花たちがふしをつけてうたってくることが愉快でたまりません。

胸のうちにこちよいさざなみたちが、全身が幸福感につつまれました。千鳥さんのなかにもあつたお山の恐怖も、すっかり鳴りをひそめました。

そうだ！ 千鳥さんは目を見ひらき、二度三度、飛びあがりました。

いつかお山で音楽会をしようと、千鳥さんはそうおもいたったのです。

——みんなでいろんな音を、色とりどりの音を鳴らしながらうたえたら、どんなにすてきなことだろう！

台所へいき古代子さんにそのゆめを語ると、古代子さんはしゃがんで、両手で千鳥さんのやわらかなほおをやさしくつつみこみました。

——とってもすてきなことだとおもうわ！ チドリはその日のために、たくさん詩を書きなきゃね。小鳥さんや虫さんたちにうたってもらいましょう。

古代子さんはいつでも、どんなときでも、千鳥さんにとっていちばんの味方です。

——おかあさんはどんな楽器を鳴らしたい？ お花の楽器？ 小枝の楽器？

——そうねえ。草笛をふいてもいいし、タヌキさんみたいにおな

かをボンポコたたいて鳴らしてもいいわ!

古代子さんの冗談に、千鳥さんはおなかをかかえて大わらいしました。

古代子さんはおおげさにおなかをたたいてみせて、さらに千鳥さんをわらわせます。

ふたりとも目になみだをうかべて、わらい声をあげました。

夕食の準備が整ってからちやぶ台のほうを見ると、お花たちは歌をうたうのをやめ、ねむっていました。すっかり安心したのでしよう。すやすやと、すこやかな寝息まできこえてきそうです。

おんがくというのは、ふしぎだ。と千鳥さんはおもいました。たのしいおんがくをきけばこころがおどり、こわいおんがくをきけばこわくてねむれない。いつもはこわくないお山も、きょうは風がびゅうびゅうふいて、別人みたいにおそろしかった。せつかくきくのなら、たのしい、うれしいおんがくがいいな。みんながしあわせな気もちになれるといいな。

鳥さんや虫さんたちは、どんな気もちで夜をすごすのだろう……。千鳥さんは窓をすこしあけ、ふきあれる風の悲鳴を顔やおにうけながら、世界が一刻も早く寝しずまるよう子守唄をうたいはじめました。

古代子さんが千鳥さんにうたってあげる子守唄を、きょうは千鳥さんが世界にうたってあげるのです。

なんどもなんども、鳥さん虫さんたちに届くよう、祈りながら。

◇このちいさな物語は、七歳で夭折した田中千鳥の詩「しぜんのおんがく」にインスピレーションを受けて書きました(主人公の「千鳥さん」は、私の勝手なイメージです)。千鳥さんの詩の魅力が、ひとりでも多くのかたに伝わりますように。

「田中千鳥の世界」<https://kanakachidori.org/>

## ズンズンズン

江夏名枝

「色彩を塗るにつれて、デッサンも進むのだ」セザンヌの言葉がよぎる。何のことかと云えば、昨年の刊行時から何度も頁を開いた大橋政人さんの最新詩集『反マトリョーシカ宣言』の作品群から、いまだ離れられずにいる。

カタチがあつて色がついたのか

色がまとまってカタチになったのか

カタチと色を

混ぜ合わせても

生きた花にはならない

「カタチを脱ぐ」

カタチは／一瞬の／時間の凍結。との詩句もある。カタチは、生活を営むうえで(仮の)妥協点の連続なのかも知れず、それを欠いた世界では、他者との会話はもとより、接触すら難しくなりそう。けれど、カタチに囚われることで生の弾力を感じる瞬間が閉却され、さみしく朽ちた自分になってしまふので怖い。

言葉(思い出)を立休にしてしまふグロテスクに

気づいていたのだろうか

生身の人間は誰でも

成長の跡を見せることなく成長する

「反マトリョーシカ宣言」